

# 農業と科学

CHISSO-ASAHI FERTILIZER CO LTD

1986  
11

## 温州ミカン幼樹の生育に及ぼす コーティング肥料の影響について

大阪府立大学農学部

湯田 英二

### はじめに

本年8月4日まで Washington D.C.[の郊外にある, Rockville, の Crowne Plaza で国際植物栄養会議が開催され, そこでコーティング肥料を用いた試験成績の発表を行った。

コーティング肥料についての情報は欧米諸国にはまだそれほど広まっておらず, 勿論発展途上国ではなおさらのことである。従って, 発表の終わった質疑応答のときや総合討論のときに, この肥料についての質問や意見が多く出された。今後, 海外においてこの種の肥料の研究が盛んになるものと期待される。以下, 会議での発表論文の内容を述べる。

ウレアホルム, 合成緩効性Nなどの緩効性肥料の実用的な使用は, アンモニア態チッソ肥料である硫酸を主体とした配合肥料を常用してきたわが国柑橘園における肥培管理法を変貌させた。増収をねらいにした硫酸系速効性肥料の大量施用は1960年代, 温州ミカンの生産地帯においてごく普通に行われた肥培管理法であった。その結果, pH土壌は低下し, Mn過剰による“異常落葉”という大問題を全国各地で引き起こす結果となった。しかし, 速効性肥料の一部を緩効性肥料で置き換え, 土壌 pH を矯正することによって, 間もなくこの問題は解決された。

この緩効性肥料は近年更に検討が加えられ, チッソ旭肥料株式会社では, ロングという, 肥料成分を限られた一定期間内に徐々に溶出させることが可能なレジン被覆した肥料を開発した。

ロングはN肥料を40~270日間に溶出する肥効性が極めて秀れた緩効性肥料で, わが国のみならず, 海外の市場にも進出を目指している。

本研究はこの肥料が温州ミカンにも有効であるかどうかを他の肥料と比較検討した。

### 材料及び方法

樹勢のそろった2年生“興津早生”を各処理区10樹供試した。供試土壌は消石灰を混合した砂壤土で, これを10ℓ用のバケツに入れ, 1985年4月に供試樹を植付け第1表の本実験に用いられた肥料(N:P:K=16:10:10)

肥料の種類	N(g)/鉢	処理回数
緩効性肥料		
ロング 100	6(x1)*, 12(x2)**	1
ロング 180	" "	1
合成緩効性N ***	" "	1
速効性肥料		
NaNO <sub>3</sub> (NO <sub>3</sub> -N)	2(x1), 4(x1)	3
(NH <sub>4</sub> ) <sub>2</sub> SO <sub>4</sub> (NH <sub>4</sub> -N)	" "	3

\* 過去の実験に準拠した標準量, \*\* 標準量x2,

\*\*\* 2-oxo-4-methyl-6-ureido hexahydropyrimidin.

た。表土から5cmのところから第1表に示した肥料を混入, 緩効性肥料の施用は元肥1回, 速効性肥料は3回分施(2か月間隔)で行った。果実は各樹3個に制限し, 収穫時に果実の大きさならびに品質を調査した。樹幹直径, 新梢伸長は6月から11月にかけて2か月に1回測定

### 本号の内容

§ 温州ミカン幼樹の生育に及ぼす  
コーティング肥料の影響について……………(1)

〔大阪府立大学農学部 湯田 英二

§ 近郊の梅栽培とグリーンパイル……………(5)

東京都三田農業協同組合  
理事 鶴岡 正 登

した。葉のサンプルも同様に行い、分析に供した。1986年3月にせん定を行い、そのせん定量(生重)を測定した。葉のクロロフィル含量は100%エタノールで抽出し、比色法で測定した。また、1986年4月下旬、各処理区の

着花数をかぞえた。

結果

樹幹直径

生長期間を通じてロング(標準量)の樹幹直径増加量

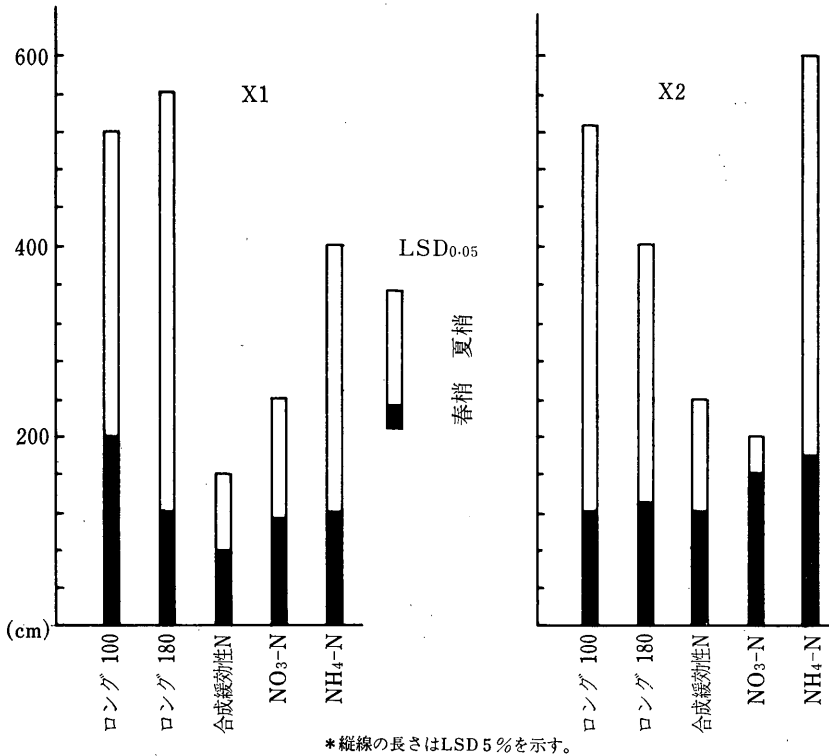
は最も大であったのに対し、合成緩効性N、NO<sub>3</sub>-Nは標準区の倍量施用しても、それが低かった。なお、ロングの倍量区はいずれのタイプでもその増加量が標準区のものと同変わらなかった(第1図)。

新梢伸長量及びせん定量

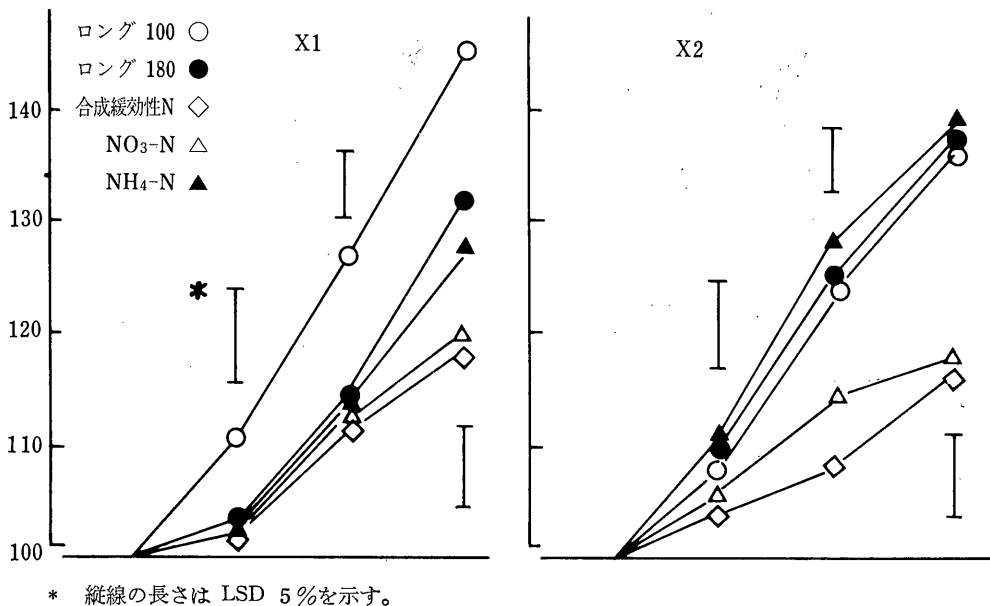
ロング100及び180の標準区、倍量区、NH<sub>4</sub>-Nの新梢伸長量は大であったが、合成緩効性N及びNO<sub>3</sub>-Nではいずれの施用量区でもそれが低かった。

春季のせん定量は当然のことながら前年の新梢伸長量と比較関係にあった。

第1図 施肥した肥料の違いが樹間直径の増加量に及ぼす影響



第2図 施肥した肥料の違いが全春夏梢の伸長量に及ぼす影響



葉分析

葉中N含量は、NO<sub>3</sub>-Nを与えたものが最も低く（標準区：2.25~2.57%，倍量区：2.31~2.57%），NH<sub>4</sub>-Nを与えたものがそれに次いで低かった（標準区：2.47~2.77%，倍量区：2.68~3.03%）。葉中P含量は、ロングを使用すると、一般的にやや低い値を示し、ロング100の倍量区でそれが顕著であった（0.08~0.12%）。葉中K含量は合成緩効性Nにおいて最も高かったが（標準区：0.77~0.96%，倍量区：0.70~0.92%）。NO<sub>3</sub>-Nを用いた場合はそれが低かった（標準区：0.50~0.76%，倍量区：0.44~0.72%）（第3図）。

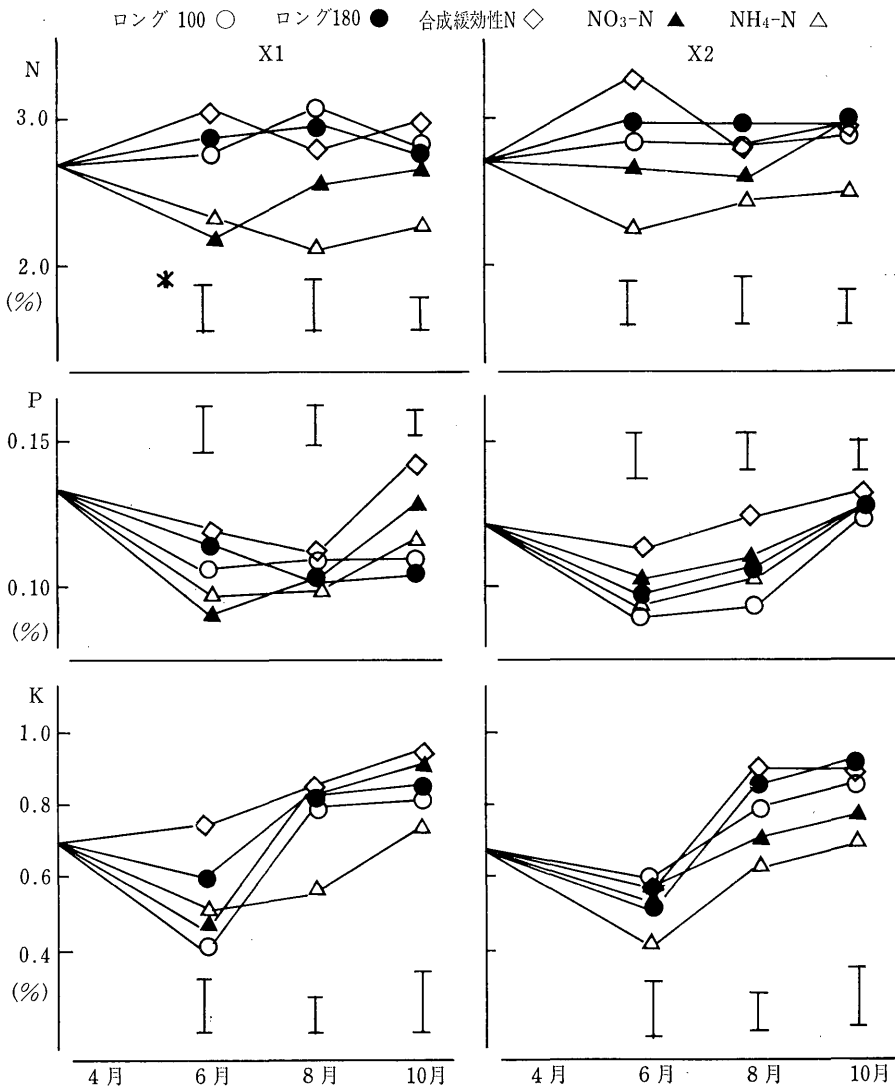
クロロフィル含量

ロングを施用した処理区では肉眼的にも明らかに緑色が濃く、クロロフィルの測定値もロング100及び180の倍量区でそれぞれ32.6μg/cm<sup>2</sup>、33.4μg/cm<sup>2</sup>と高く、NH<sub>4</sub>-N及びNO<sub>3</sub>-Nのものより2~2.5倍であった（第2表）。

着花数

1986年4月にかぞえたロング100の着花数は標準区192.3花、倍量区167.6花と他の区のものより著しく高かった。合成緩効性Nの標準区、倍量区及びNO<sub>3</sub>-Nの倍量区はその値が著しく低く、それぞれ12.0、9.8、16.4花

第3図 施肥した肥料の違いが温州ミカンの葉内3要素含量の経時の変化に及ぼす影響



\*縦線の長さはLSD 5%を示す。

であった。その他の区は中間的な値を示した(第3表)。

### 論議

ロングはその肥効に関して、イチゴ、キウリ、トマト、切花、鉢物類でかなりの規模の試験研究がなされている。それらの報告をみると、いずれもロングの施用が良好な結果をもたらしており、他作物への適用試験にも

**第2表 施用した肥料の違いが温州ミカンの葉内クロロフィル含量に及ぼす影響**

肥料の種類	クロロフィル( $\mu\text{g}/\text{cm}^2$ )			
	a	b	全	
ロング 100	(x1)	17.0 <sup>bc</sup>	6.4 <sup>cde</sup>	23.4 <sup>b</sup>
	(x2)	23.6 <sup>a</sup>	8.9 <sup>ab</sup>	32.6 <sup>a</sup>
ロング 180	(x1)	20.1 <sup>ab</sup>	6.9 <sup>bcd</sup>	27.0 <sup>b</sup>
	(x2)	23.1 <sup>a</sup>	10.3 <sup>a</sup>	33.4 <sup>a</sup>
合成緩効性N	(x1)	10.7 <sup>cd</sup>	4.4 <sup>ef</sup>	15.1 <sup>cd</sup>
	(x2)	18.9 <sup>abc</sup>	8.0 <sup>bc</sup>	26.9 <sup>b</sup>
NO <sub>3</sub> -N	(x1)	8.8 <sup>d</sup>	4.1 <sup>c</sup>	13.2 <sup>d</sup>
	(x2)	10.1 <sup>cd</sup>	4.1 <sup>c</sup>	14.2 <sup>d</sup>
NH <sub>4</sub> -N	(x1)	11.9 <sup>cd</sup>	5.4 <sup>def</sup>	17.3 <sup>cd</sup>
	(x2)	14.0 <sup>c</sup>	4.4 <sup>ef</sup>	18.4 <sup>c</sup>

アルファベットの違いのある数字間にはダンカンの多重検定法5%レベルで有意。

**第3表 春季における剪定量と着果数**

肥料の種類	剪定量(g)	着果数	
ロング 100 (x1)	147.1 <sup>a</sup>	192.3 <sup>a</sup>	
ロング " (x2)	81.2 <sup>a</sup>	167.6 <sup>a</sup>	
ロング 180 (x1)	136.7 <sup>a</sup>	70.5 <sup>bc</sup>	
ロング " (x2)	108.7 <sup>ab</sup>	58.2 <sup>c</sup>	
合成緩効性N	(x1)	23.5 <sup>cd</sup>	12.0 <sup>d</sup>
	(x2)	33.4 <sup>cd</sup>	9.8 <sup>d</sup>
NO <sub>3</sub> -N	(x1)	28.1 <sup>cd</sup>	94.8 <sup>b</sup>
	(x2)	11.6 <sup>d</sup>	16.4 <sup>d</sup>
NH <sub>4</sub> -N	(x1)	57.5 <sup>bc</sup>	80.0 <sup>bc</sup>
	(x2)	79.2 <sup>b</sup>	84.8 <sup>bc</sup>

アルファベットの違いのある数字間にはダンカンの多重検定法5%レベルで有意。

期待がもたれる。

愛媛県で行われた柑橘幼樹に対するロングの試験結果では、他の慣行性肥料に比べて、樹冠容積、樹幹容積、収量についてはロング180を用いた場合に良好な結果がえられたと報告している。本研究においては栽培容器として10 l入りのバケツを使用したためかやや異なった結果がえられた。

緩効性肥料間でそれらの肥効を比較したところ、合成緩効性Nが樹体の生長や春季の着花数で著しくおとつたのは、降雨や盛夏期の頻繁なかん水によって肥料成分が

容易に流亡したのに対し、ロングは同様の環境条件下でも適度に肥料成分の溶出がコントロールされたためでないかと考えられた。

NO<sub>3</sub>-Nを施肥した供試樹の生長が不良であったのはN肥料が供試土壌から合成緩効性Nより更に容易に流亡したためと思われる。しかし、NH<sub>4</sub>-Nを施用すると、特に倍量区ではロングとほぼ同様に健全な生長がみられた。これはNH<sub>4</sub>-Hを施用した土壌のpHが6.0~6.5に保持された結果によるものと思われる。

ロングと類似する肥料としてアメリカで開発されたオスモコート(Osmocote)があり、Harfaughは菊、ポインセチア、ガーベラを用い、また、LumisとGohnsonは杜松、ホワイト・シダー、レンギョウを用いて、この肥料の肥効をロングと比較した小規模な試験を行っている。

### おわりに

著者は自宅の庭に約60坪ほどの家庭菜園を楽しんでいるが、そこで作られた野菜や果菜類のできぐあいは、いずれも農学部の栽培系の講座に席を置くものとしては恥しいものばかりであった。皆さんもご承知のように、どんな作物でも手を加えて可愛がってやればやるほど良いものができるわけで、著者のように自宅からの通勤時間が一時間半以上の場合はどうしても粗放栽培にならざるをえないと、不良收穫物を手にしては言訳けをしてきた。

ところが、ロングの供試品を使用させてもらってから、それ以前にはみられなかったような立派な野菜がとれるようになった。特に、肥料摂取が極めて貧欲なナスビやトウモロコシなどで、それが顕著となった。

これがきっかけで、比較的粗放栽培に耐えられる柑橘類の、特に幼樹に有効ではないかと考え、本研究に着手したわけである。筆者が最も興味をもった研究結果は、栄養生長の極めて良好であったロング100区で、春先の着花数(生殖生長)が最も大であったことである。すなわち、一般的には栄養生長が旺盛であると生殖生長が抑えられ、栄養生長が抑えられると生殖生長が良好になると考えられているからである。

このコーティング肥料が土壌中のN濃度を常に高く保たせていることは分析結果(データ省略)からも明らかであったが、土壌pHが他の肥料に比べてやや低くなる傾向があり、この点については今後検討していかねばならない。

しかし、溶出速度の異なったいろいろなタイプのロングを柑橘類に施用することにより、これまででない画期的肥培管理法が確立されるものと期待する。

## 近郊の梅栽培とグリーンパイル

東京都三田農業協同組合

理事 鶴岡正登

(元東京都農業改良課技師)

### 1 はじめに

農業改良普及事業が発足して以来、昭和53年迄私は東京都西多摩地区担当の普及員として活動して来ました。退職後は同地区内にある三田農協の理事として管内近郊梅栽培農家の経営状況を眺めたり、我が家の梅園を手入れする等で、日々を過ごすようになりました。

今回は、退職後の8年間に改めて気付いた、近郊の梅栽培のポイント、特にリン酸の肥効を重視した深層施肥の実現が計れたグリーンパイルの効果など併せてご紹介したいと思います。

### 2 我が家の梅園と周辺状況

#### (1) 周辺状況

我が家が所在する青梅市の名は、今から「およそ」1,050年前の承平年間、承平の乱として史話に残る平将門が京に上り、情況説明を行った帰路、「馬の鞭にしていた梅の一枝を土中に挿したものが根付き、これが育って秋になっても尚梅の実が青々としていた」ことに由来しています。それだけ古くからこの周辺には梅樹が多く、樹令400年の古木を含む吉野梅郷(25,000本)も、すぐ近くにあります。

私が所属する三田農協は、国電青梅線の石神駅から御嶽駅周辺農家を組合員としていますが、吉野梅郷に比し、駅に近く、便利な環境にあります。従って梅栽培農家でありながら働きに行ったり、その他で、農作業については、如何に省力化し乍ら収益性を改善するか、を考えねばならぬ状況にあります。

ちなみに、三田農協の組合員戸数は1,207戸の内、正組合員の戸数は665戸でその内65戸が梅を栽培し出荷しています。収穫が期待される成木は1,500本位と見られます。昭和59年、60年の過去2ヶ年、農協取扱いの梅酒向果実の出荷量売上額は、59年17トン、722万円(平均単位424円/kg)60年10トン、622万円(同612円/kg)でした。仮に成木1,500本を持つ農家の収穫量の半分が出荷可能で、農協への出荷率が80%として逆算すると、三田農協管内の梅樹1本当たりの果実収穫量は25~40kgと想定されます。

#### (2) 我が家の梅園

以前、農業試験場の仕事に携った経緯から、昭和35年種苗登録された梅酒用品種「玉英」を昭和38年6aの畑

に23本植付けました。(40本/10a)以後間伐して現在5本と授粉樹(梅郷)3本が6aの処に植えられています。

現在ある玉英5本の樹形は別図一1の通りで、概ね樹高4m前後、枝長5~6mで、主枝を3本立とした開心自然形に整枝したつもりです。

今回は退職した53年から現在に至る年間、我が家の梅樹に対して、収量増加と収益性改善に努め乍ら気付いた反省点や、新しい管理技術を近郊農村地帯の立場を含めて紹介させて貰います。

### 3 近郊梅栽培の管理ポイント

前述したように都心に近い農村で当面する問題は、①農業収入より収入が割高で体が汚れない働き場が手近にあるので、農作業を行う人が少なくなり、若い人がいなくなった。②然し乍ら少しでも農地を残すなら収益性の高い作物を植え、収入を増やしたいが、収入増に比例する手間が掛けられない矛盾した環境にある。等だと思います。従って農作業は重点配分し、大事と思える時期、場所に積極的な力を注ぐことかと考えます。

#### (1) 間伐について

前述したように38年に植樹し乍ら、退職する53年迄の15年間に一本も伐採せず過ごしてしまいました。そして53年から61年迄の8年間に18本を伐るような荒い間伐をしてしまいました。成木時に樹間1m程度の空間を持たせることが、太陽光線を良く入れ、樹勢が良くなる事につながります。従って当地のような処は、植付後10年目の48年頃迄に、植付数の1/2位に間伐して20本/10a位とし、その後5年たった53年頃迄に12本/10a位にすべきだと思ってます。言い換えれば梅樹も植付は計画密植として計画的に間伐して樹勢の強化を図り、樹令17年の成木となった53年以降は樹勢により12本/10a位に仕立てるべきと考えてます。間伐のおくれが現在の樹形に影響し、やや這う形の開心自然形にしてしまったかと反省しています。

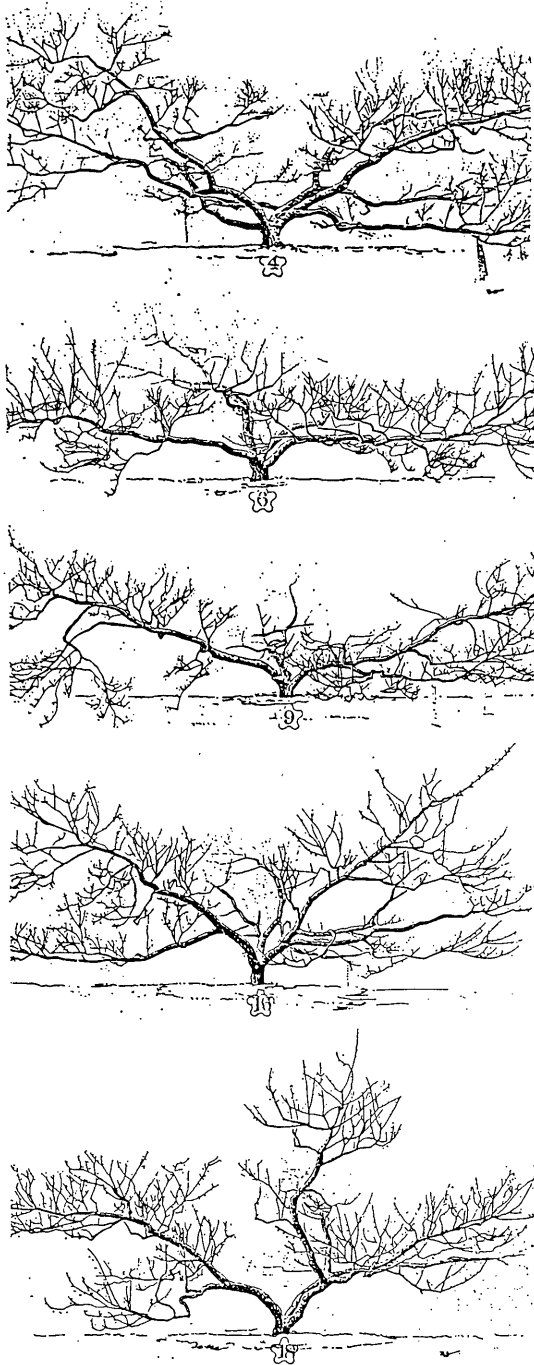
#### (2) 整枝について

梅は光線の要求度が極めて高いので、樹形を乱したり、日蔭を作るような場を多くしてはいけません。それに主枝、亜主枝の仕立て方が大事で、主枝を放任すれば開張し、仰角<30°以下になると徒長枝を多発し結果的に日蔭を作るようになります。よって主枝から2~3本の

亜主枝を出させ側枝が主枝，亜主枝の空間を埋めるように仕立てる必要があります。特に亜主枝の出させ方ですが，品種特性を心得て冬季，夏季剪定時配慮すべきで

す。往々亜主枝が主枝と上，下に平行の形で走るようなことがあるので，必ず側方に展開するよう整枝すべきと思っています。玉英については樹の伸長と共に亜主枝は主枝1本に1本，せいぜい2本とした方が光線の通りが良いと見えています。

図一 我が家の梅樹の樹形



(3) 夏季剪定について

この辺は，樹冠形成期の夏場に入ると強い徒長枝が発生し樹形を乱したので，以前から捻枝と言う作業を行っていましたが，夏季剪定が必要と言う認識が無かったようです。

摘芽，摘心を含め徒長枝を切落すことにより無駄に樹勢を費すことがなくなり，空間が出来たお蔭で光線量が増え，結果枝が充実して収量増につながる事，隠芽の芽出しを促すことです。剪定の時期とすれば，既に群馬農試による花芽分化期（品種，白加賀）の調査で明らかであるので，花芽分化が始まると見られる8月10日頃迄に（当地での作業予定としては，収穫直後の6月から7月末迄の間）終えるように実行したいと考えています。

(4) 肥培管理について

基本的には別図一2にある猪熊敏郎氏の施肥要領（毎年よくなる木）に準じて施肥しています。具体的には別図一3の通りで，57年度は，標準とする施肥量にグリー

図一2 梅の木の状態による施肥要領

施肥の目的	木の状態 時期	毎年よくなる木	枝が伸び過ぎて ならない木	放任の毎年 ならない木
		元肥	7月上旬、中旬	35%
貯蔵澱粉蓄積	8月上旬	15%	20%	20%
花肥1.	11/下~12/上	10%	20%	30%
枝梢伸長、落果促進				
芽出肥2.	3月中旬	-	-	-
枝梢伸長、葉数確保				
玉肥3.	4月下旬	30%	-	-
果実肥大促進				
玉肥4.	5月下旬	10%	-	-
同上				

○年間施肥量=成木でN15~20kg、苦土はMgOで年間20kg以上冬にやる。

○落葉果樹栽培12ヶ月 猪熊敏郎編 農山漁村文化協会(38.12.1)

ンパイルを加え，打込みました。グリーンパイルはこの1年だけでしたが肥効は何年も続いたようで，初冬迄葉が落ちず元気な樹勢を示すようになりました。

梅の施肥が他の果樹類と異なる処があるとすれば，別図一3にあるように元肥の施肥期は夏場であること，春の乾燥期対策を考えることと思います。

即ち，収穫後の樹勢の疲れを癒すことと同時に，来年度も更に多くの果実を着けられる旺盛な樹体にする事を目標に，言わば礼肥と元肥が一緒になった感覚で，収穫後の7~8月に元肥と称し，年間施肥量の約半分を施

図-3 梅樹に対する我が家の標準的施肥量

10本/10a当り

施肥の種類	施肥時期	使用肥料	施肥量
元肥	7/上、中旬	化成肥料(8-8-5)	100kg
花肥	12~1月	鶏糞(3-3-1.5)	200kg
玉肥	4~5月	草木灰 (自家産0-1-3)	200kg
玉肥 (乾燥防止)	4~5月	液肥 (10-4-8、200倍液)	1,000ℓ
地力増進	4~5月	落葉下草のマルチング (0.4-0.1-0.4)	100kg
深層施肥	57.1/末	グリーンパイル (17-10-10) 300g/本	40本

成分換算

(単位:kg/10a)

	N	P	K
化成肥料	8	8	5
鶏糞	6	6	3
草木灰	-	2	6
液肥	0.5	0.2	0.4
落葉、下草	0.4	0.1	0.4
小計	14.9	16.3	14.8
グリーンパイル	2	1.2	1.2
再計	16.9	17.5	16.0

します。その後12~1月には盛んな開花を促すつもりの花肥を、4~5月には果実の肥大促進と、春の乾燥に対応する乾燥防止対策として液肥を撒いたり、落葉、刈取った下草等を幹周りに耕し込んだりしておきます。

(5) グリーンパイルの施用法と効果について

普及員在職時代、樹本専用の打込肥料としてのグリーンパイルを知りました。

そこで、肥料養分としてリン酸の移動が極めて少ないことから、グリーンパイルなら深層迄リン酸を供給し梅に効果が出ようと考え、53年に4号樹に使用して見た処良い感触を得ました。そこで57年全樹(4, 6, 9, 16, 18号樹)に1樹当り300gの業務用グリーンパイルを4本宛打込みました。この辺の地層は秩父古生層に若干沖積土が交り、乾燥期や冬期はやや縮って固くなります。従ってグリーンパイルをそのまま打込むと折れる心配があったので、予め穴明けシャベルで深さ30cm位迄掘ってから押し込むようにしました。打込み時期は1月末でしたが、別図-4のように樹幹から半径2m位の処に夫々が等間隔になるようにしました。

このように打込み方は簡単ですが、一寸固い土では打込み途中でグリーンパイルが折れ、作業に手間取ることがあるので、前述のようにシャベル、鉄棒等で穴を明けた方が確実に深層施肥の目的が果せ、作業も反って早目に終わります。

図-4 グリーンパイルの打込位置俯瞰図

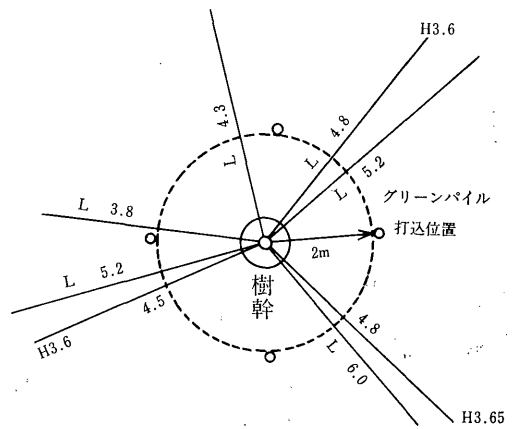


図-4 幹の肥大傾向

(単位:cm)

樹No. \ 年度	54	55	56	57	58	59	60	平均/年
4	54	61	66	71	78	87	95	6.8
6	62	69	72	75	80	89	97	5.8
9	61	66	71	75	79	86	94	5.5
16	51	56	61	65	69	73	81	5.0
18	47	53	58	64	68	76	87	6.7
平均	55	61	66	70	75	82	91	6.0

樹別収量

(単位:kg)

樹No. \ 年度豊凶別	53 豊	54 凶	55 中	56 豊	57 凶	58 凶	59 中	60 中
4	19	12	8	43	27	9	53	52
6	33	20	38	25	16	4	44	76
9	24	15	28	16	10	4	46	72
16	11	7	22	13	8	3	62	93
18	12	7	24	33	21	10	47	84
平均	19.8	12.2	24	26	16.4	6	50.4	75.4

注、豊、凶作は農協の出荷量による。

豊作=20t以上、中作=10~19t、凶作=10t以下

グリーンパイルは57年に打込んだままで、他の肥料は別図-3に示したものを標準として毎年施していましたが、57年の秋から葉の落ちるのがおそくなり、近所の梅園では概ね10月頃葉が落ちてしまうのに、我が家の梅園では尚青く、毎年12月上旬迄葉が残っています。深層に

施肥して肥料を吸収する場を広くする目的のグリーンパイルは確かに梅の落葉をおくらせ、おそく迄残っている葉で生産された同化養分が樹木に送られ、樹体の肥大、伸長→収量増につながると見られます。ちなみに61年5月57年に打込んだグリーンパイルの跡を探った処、地表から15cm位下に灰白色の固まりが見つかりましたが、触ると直ぐボロボロと崩れてしまう状態になってました。恐らく肥料成分と共にあった石膏分が残っていたものと思われまます。そして、灰白色の固まりの周りには、梅の根が取り巻き、太いものは径3~4cm細くて径5mm位の支根や、細いヒゲ根が集って、いかにも肥料を求めて根が張って来たという感じです。(別写真一) 打ち込みのない処はこのような活動的な根張りは見えませんでした。

別写真二は61.5. 写したグリーンパイル打込の梅樹ですが、果実が良くついています。

#### 4 管理の効果

梅園の手入れに時間がかけられるようになった退職後は、前述した通り自分なりに気付いた管理ポイントを実施するように努力し、併せて深層施肥効果をねらって(特にリン酸の)57年度にグリーンパイルを施した結果は、別図一5の通りです。

即ち幹の肥大傾向を見ると、概ね幹周りが最近6年の間では、1年間に平均6cm宛肥大し、1樹当りの収量は、53年20kgが59年50kg、60年75kgと飛躍的に増やすことが出来ました。57、58年の収量が少なかったのは、やや強剪定であった為と見られ、59、60年は反動的にやや弱剪定にしたのが収量増となったようです。

その昔、群馬県下の梅栽培者から1樹200kg目標の話聞きましたが、今ではその半分100kgの達成は難しくないと思えるようになりました。

仮りに10a 当り12本植えとして1樹当り60~100kgの収量とすれば

$$12本 \times 60 \sim 100kg \times 1/2(出荷量) \times 600円(60年度単価) \\ \approx 20 \sim 30万円/10a$$

となり、省力的重点的な管理でこの位の収入になればまあまあと思えます。手造りの喜びと健康食品の人氣で、梅酒用果実の需要は年々増えつつあるようです。当地区でも深層施肥効果をねらって、本年の夏からグリーンパイルに関心を持つ者が多くなって来ました。残された問題は、樹令別、施肥量、施肥位置等、梅樹に対する可成明確な使用基準を纏めることで、梅栽培の省力と増収にグリーンパイルを役立てたいと思っています。

写真一 1



写真一 2

